

## 第 14 回「教養人と知識人と（二）」

\*\*\*

君子と小人との違い。

講義 加地伸行

「論語指導士」養成講座 第 14 回講義

論語教育普及機構 代表 加地伸行

今回は「教養人と知識人と」の第二回です。

前回は、「君子」と「小人」の現代語訳のお話をしました。

私は「君子」「小人」というものを新しい解釈で訳すことに致しました。

従来は「君子」は立派な人、「小人」はつまらない人という訳語でしたが、それではぴったりしないと思ひまして、「君子」は「教養人」、「小人」は「知識人」と訳すことにしたとお話ししました。

それでは実際に、訳がどのように付いているかを具体的に説明したいと思います。

たくさん例文が出てまいりますから、気を付けてください。

『論語』の中から、「君子」と「小人」ということばを使っているところを抜き書きしました。

とりわけ「君子」と「小人」とを対比、比べている場面を多く取りました。

特別な例文であるという気持ちでお読みください。

し かいわ しょうじん あやま かなら かが  
「子夏曰く、小人の過つや、必ず文る」(子張第十九)

これは孔子の言ったことばではなく、弟子の子夏のことばです。

当然、子夏は、孔子の考える「君子」「小人」の意味を理解して言っている、そう理解して結構でしょう。

し し かい いわ なんじくんしじゅ な しょうじんじゅ な な  
前回「子夏に謂いて曰く、女君子儒と為れ、小人儒と為る無かれ、と」(雍也第六)とあったように、孔子に教えられてきましたので、十分、心得ていたと思います。

「小人の過つや」知識人がどこかで失敗したとすると、どうするかというと、必ず「必ず文る」。

「文る」は現代のことばで言いますと、言い訳をする、ということです。失敗をごまかして、言い訳をする。こういう文です。これは当たっていますね。

言い訳よりも、自分の失敗を素直に認めて、それをどうするかということを考えなくては  
いけない。

これはなかなかできることではありません。失敗を認めたくないので、あれこれと言  
い訳をする。飾り付ける。世にこういう人はいますね。

これも「小人」の一面をよく表していると思います。

しいわ くんし とく おも しょうじん ど おも  
「子曰く、君子は徳を懐い、小人は土を懐う。

くんし けい おも しょうじん めぐ おも  
君子は刑を懐い、小人は恵みを懐う」(里仁第四)

孔子のことばです。

「君子」教養人は、「徳を懐い」よく生きること、道徳的であることを念願している。

人生において、自分はよく生きたい、と。生活がいいということではありません。自分の在り方、  
心をより良い形、それは善です。そう生きたいと。

ところが、「小人」は道徳的な在り方など望まない。「土」は、地上にあるしっかりしたものと  
いうことで、地位・豊かな生活を指します。安泰な生活を思うというわけです。全然目的が違  
いますね。

一方は道徳的な在り方を、もう一方は現世の豊かな生活を求めるということです。

「君子は刑を懐い」君子は責任を取ることを考えている。「刑」は刑罰ということで責任を取る  
ということです。

「小人は恵みを懐う」、「刑」の責任を取ることに對して、「恵み」をいただくというのは、お  
目こぼしを願うということ。知識人はお目こぼしを願うと言っています。

以下、いくつかの文を紹介しますが、すべて、「教養人」と「小人」の違いを、孔子がいろいろ

な形で述べていますので、順にお話ししましょう。

「子曰く、君子は諸を己に求め、小人は諸を人に求む」（衛霊公第十五）

これは先ほどの責任の問題と同じです。「之」とは責任。「君子」は責任を己に求める。

「教養人」は自分の責任をしっかりと意識する。ところが「小人」は人に求めていく。他人に責任をなすりつける。これは何か事実があったのでしょうか。この文には実感があります。

「子曰く、君子は義に喩り、小人は利に喩る」（里仁第四）

「義」と「利」です。「義」は「正義」ということばもある通り、正しい在り方、道理、道徳。これをしっかり理解できるということを「義に喩る」と言います。「小人」は、そんなことはどうでもいいので、「利」利益、損得と言ってもいいでしょう。そういうもののほうに気が行ってしまふ。

我々、周りを見ましても、このような人がたくさんおります。

これが「君子」と「小人」の違いであります。

「子曰く、君子は和して同ぜず、小人は同じて和せず」（子路第十三）

「同」と「和」、同じ賛成と言うことばですが、「和」は公、みんなのために、という気持ちの時に使い、「同」は自分の利益のためにというときに使います。

「君子は和して同ぜず」君子、教養人は皆と和合するが、しかし、すぐに何でもかんでも賛成するようなことはない。「小人」は反対で、簡単に賛成するが、全体のために、心を合わせるということはない。これは議論が紛糾した時にわかりますね。

「子曰く、君子は言に訥にして、行いに敏ならんことを欲す」（里仁第四）

「君子」だけが出てきますが、「小人」はこの反対だということです。「君子は言に訥」は、さわやかに滑らかに話すのではなく、訥々としている、つまり口下手である。しかし、思いはきちんと持っているから、「行いに敏ならんことを欲す」大事な在り方に対しては、速やかに行動する。口上手ではないが、行いは素早く、しっかりとしている、ということです。これも実体験があったような気がしますね。

「訥々として」は見下げた意味ではなく、むしろ誠実な物言いを指します。

「子曰く、君子は其の言の其の行いに過ぐるを恥ず」（憲問第十四）

「君子」教養人は、「其の言」発言内容が、「其の行いに過ぐるを恥ず」実際の行動より、オーバーになることを恥じる。発言は行い通りか、あるいは、行いは発言以上であることがいいということです。

「子曰く、君子は器ならず」（為政第二）

これは難しい。普通はこう解釈します。

「器」は入れ物、容器。入れ物にはいろいろあります。丸い入れ物、四角い入れ物などありますが、丸い入れ物に四角の物を入れる、四角の入れ物に丸い物を入れる、するとそれぞれ隙間ができます。

だから、器というのは、ものの役に立つと言っても、ある限られた役にしか立たない。

しかし、「君子」教養人はそうではない。丸の時には丸になり、四角の時には四角になる。自由に、臨機応変なのだという解釈です。

これは組織の中において、マネジメントなどの際によく使われます。四角四面な考え方や方法ではなく、柔軟に対応していかなくてはいけない、ということです。

しかし、これにはまったく別の解釈があります。

器は現実に見に見えるもの。そうではないと言っているのだから、器は、目に見えるものではない、抽象的なことであるという解釈です。

「君子」は、現実を超えた、目に見えない抽象的なことを考えることができる、という解釈があります。ですから、全体的なことを考えることができるということです。全体というのは抽象的なことですからね。

「しこう くんし と し い わ ま お こ な そ げ ん し か の ち こ れ し た が  
子貢 君子を問う。子曰く、先ず行<sup>ま</sup>う。其の言<sup>い</sup>や而<sup>ま</sup>る後<sup>のち</sup>に之<sup>これ</sup>に從<sup>したが</sup>う、と」(為政第二)

子貢、孔子の弟子で、重要な人物です。彼が孔子に「君子」とは何ですかと尋ねた。孔子はすぐ答えました。「まず行<sup>ま</sup>う」実行、実践である。「其の言<sup>い</sup>や」ことばや説明は実行の後でいい。すべきことはすぐにせよ、ということです。

し い わ た だ じ ょ し し ょ う じ ん や し な が た な こ れ ち か す な わ ふ そ ん  
子曰く、唯女子と小人とは養い難しと為す。之を近づければ、則ち不遜なり。

こ れ と お す な わ う ら  
之を遠ざければ、則ち怨む」(陽貨第十七)

これは男女差別だという人がおりますが、私は違うと思います。

「女子と小人とは養い難しと為す」女性と「小人」は付き合い方が難しい。こういう解釈をしています。なぜなら、仲良くしますと、たちまちつけあがって、わがままになる。遠ざけると怨む、不平を言う。どうやら孔子は女性にだいぶ苦しめられたようです。奥さんとは離婚していますし、なかなか大変だったのでしょう。

これは決して差別ではなく、己の人生を省みて、難しいなぁと嘆じたことと思えば、孔子の人間性が、また、そこに表れていることばです。

今回は「教養人と知識人と」の第二回のお話でした。